

こうこうもの

「孝行者の「まさん」」

神子の森のお話

何時のことかははっきりわかりませんが、徳川時代に生まれた人で、とても親孝行人が鈍川の神子の森にいました。この人は、貧しい家に生まれて、とても気の短いお父さんにやさしくしていただきました。

ある時のことです。お父さんと二人で山へ仕事に行きました。お昼になったので、持って来たお弁当を開けてお父さんに渡しました。するとお父さんは、

「こがな麦だけの弁当が食えるか。」

と言って、谷へ捨ててしまいました。

貧しかったので、お麦だけのお弁当でも、とても大切な食べ物でした。それで、お父さんが捨てたお弁当を、また拾ってきれいにゴミをのけて包んで持って来ました。

そして、夕方の四時ごろにまた出してお父さんにあげました。お父さんは、お腹がすいていたので、喜んで食べました。

またある時は、お父さんが、病びようき気で寝ね込んでしまいました。

その時、この人は、まきを売りにお弁当べんとうをもって出かけました。

もう家には、御飯ごはんがありませんでした。それで持っていたお弁当べんとうを食べないで持って帰って病気のお父さんに食べさせました。

食べ物ばかりでなく、着る物もありませんでした。

それで昼も夜も働はたらいて、自分はぼろを着ても、お父さんやお母さんには新あたしい物を着せてあげていました。

このような孝行いまばりが今治のお殿様とのさまの耳みみに入って、「ほめじょう」をいただいたそうです。

この人がなくなつて何年かたつて、神子の森の人々が、この人のことを立派りっぱな人だから後の世にも残るようになつたこと、
鈍川村にぶかわむらの人々に呼びかけて、大きなきれいな石せきで石碑せきひを建てました。この人の名前なまえは、よくわかりませんが、「こまさん」と呼よび呼よびされていたそうです。

お墓はかの石には、「孝子半六こうしはんろくの墓かみ」と刻きまれております。

今でも村人むらびとたちは、時々お参りまじりしています。孝子半六しそんさんの子孫しそんは、今も神子の森に「森」という屋号やごうでよばれてお宮みやのそばそばに住すんでいます。